

# act

art,  
culture,  
tradition

## 21

November 2015

[発行] 札幌市教育文化会館  
アクト第21号



心を打つ、  
面を打つ。



# 能面作家

呼吸を止める。タイミングを見計らい、  
ゆっくりと手を動かす。息の苦しくなる  
ギリギリまでその緊張感で一本の毛を  
描き、自ら研いだ刃で、硬質な檜をなめ  
らかな乙女の頬に彫り上げていく。気の  
速くなるような工程の末、一進一退を続  
けながらつくりあげた面にはきっと、人  
間にしか生みだすことのできないなにか  
が写し取られている。600年以上つづ  
く能の世界を、ひたむきに面へと写し続  
ける。それが能面作家。







# 【インタビュー】 INTERVIEW

仕事を続けつつ、30年以上も能面を打ち続けてきた小樽在住の能面作家・外沢照章さんに、能面づくりの魅力についてお聞きしました。



# 心を打つ、面を打つ。

## プロもアマも、目指す高みはひとつ。

能面を作り始めたのは42歳の頃です。当時、開発の仕事に携わっていたのですが、行き詰まり、家の中でも四六時中悩んでいました。そんな私を見て、妻が能面教室に連れて行ってくれたんです。私の親父は建具屋で、小さな頃はよく親父の切った木片で遊んでいました。戦後だったので遊び道具もろくになかったんですね。ですから木の扱いには慣れていて、教室に行って、これなら自分にもできそうだと。親父の形見にもらった大工道具もいつか使おうと思っていましたから。それから、惚れ込んだ能面師の先生のもとで17年ほど教えを乞いました。能面自体は順調に進めば2ヵ月くらいで完成させられるのですが、先生は1年で1面できればいいよとおっしゃるんです。でも、当時の私としては作れるのなら次々作りたいと思っていました。その方が楽しいと思っていたんですね。先生の面の姿か

たちと似ていれば、それでいいだろうと。ですが、能の面というのはひとつの面につき、ひとつの能の物語を持っています。曲ごとに面が決まっているのです。先生がゆっくり作れとおっしゃったのは、面ひとつひとつの背景を深く理解しなさいということだったんです。そのことがわからずに打っていた面は、今見ると没にすることが多いですね。姿かたちはそっくりに写していても、舞台に相応しくない、それらしく見えないからです。曲を理解していないと、髪の毛一本でさえも「写す」ことはできません。能面づくりの作業ひとつひとつに、能への理解がなければいけないのです。私はあくまでアマチュアですから、私の面が舞台上で使われることはありません。ですが、能という領域に入って面を作るからには、頂点を極めるために励まなければと思っています。能面作りが富士山くらいに高い技量が必要だとしたら、ただ一步一步登っていく。自分が何合目にいるかなんて問題ではないんです。登るという姿勢が大事なんです。能面作りの面白さは、自分のできないことに対して、常にチャレンジしなければいけないところにあります。世阿弥が記した「初心忘れるべからず」は、習い始めた時の初心を忘れるな、とい

う意味ではありません。高みを目指せば、何歳であっても初めてチャレンジすることがあり、学び続けるべきだということを伝えており、その謙虚な姿勢は能の世界そのもののなのです。ですから、30年以上続けた今でも、チャレンジしなければいけないことが未だにいっぱいなんです。面の基本形である91種すべてを打つ、という目標もあります。まだまだ、これからですね。

### PROFILE 外沢 照章

Teruaki Sotozawa  
小樽在住。東京都出身。仕事をしながら42歳から面を打ち始める。現在までに打った能面の数は約80面。平成21年より、小樽市能楽堂に隣接の小樽市公会堂において、毎年展覧を開催している。

[外沢照章・能面ギャラリー日記]  
<http://kitutukione.blog97.fc2.com/>

能面づくりの難しさ。それは、0.1ミリの狂いも許されない、正確な「写しの技術」が求められること。その技術の習得までの過程、能楽そのものへの造詣…まさに身も心も打ち込み続けないとたどり着けない、能面づくりの魅力に迫ります。

act  
art, culture, tradition  
21

### 能面の出来るまで

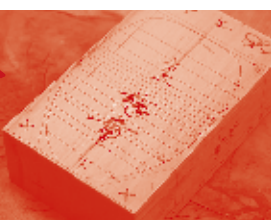
## 写しにはじまり、写しにおわる

江戸時代以前につくられた能面の完成形「本面(ほんおもて)」をいかに現代に再現するか。能面づくりのほんの一端をご紹介します。

### 写

墨入れ

型紙とモデル面をもとに設計図をつくり、檜の木に書き込んでいく。「この時点で完成面のイメージが出来ていないと失敗しやすいです」と外沢さん。



### 型紙

CTスキャンのように、「本面」の表面をかたどった型紙。25枚ほどあり、複雑な面ほど増える。「本面」を写した「モデル面」も必須。型紙の寸法が狂っていることもあり、まずモデル面と型紙が一致するように調整することから作業は始まるのだそう。色彩や汚れも後々写し取る。



## 彫

### 木地仕上げ

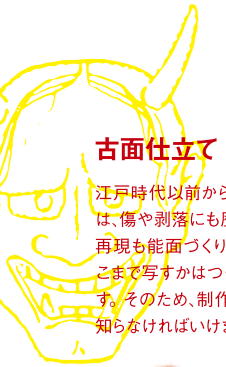
木取り、粗彫り、と徐々に彫り進めていき、木地仕上げでは型紙とモデル面とで付き合わせながらそっくりに彫る。「繊細な作業のため、腕のうぶ毛を撫でてみさつと切れるくらいに彫刻刀を研いでおきます」



## 塗

### 天眉(てんまゆ)書き

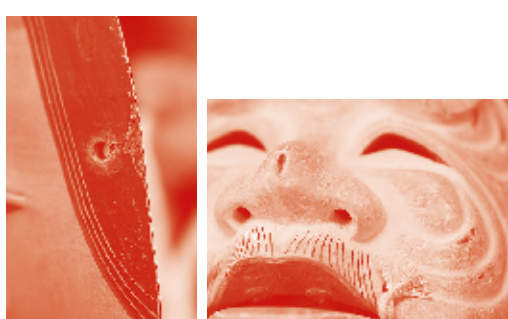
面全体の塗り、髪などを描く筆書きの工程のなかでも最終段階。能面の師匠から授かった貴重な彩色絵具を調合し、ゆっくり置くように眉を描いていく。



## 傷

### 古面仕立て

江戸時代以前から使われていた「本面」は、傷や剥落にも歴史や趣があり、その再現も能面づくりには重要な工程。「どこまで写すかはつくり手の判断によります。そのため、制作者は能のことを深く知らなければいけません」



## 秘すれば花 ~能面のヒミツ~

シンプルなようでいて、実はさまざまな仕掛けが施されている能面。計算され尽くされた美しさのヒミツとは。

### 角度で変わる表情

能面は、世界で唯一からくりなどの仕掛けを使わずに表情を出せる面と言われている。目の際が角度を持って立体的に切つてあるため、角度によって表情が変化するように見える仕組み。



### 照る(テル)

面をやや上に向け、歎びなどの心の状態を表現する。



### 曇る(クモル)

面をやや下に向け、悲しみなどの心の状態を表す。



### 左右非対称がつくりだす美

能面は整った顔のように見えるが、じつはどの面もわずかに左右が非対称。その微妙なズレが、役の個性と人間的なリアルな魅力をつくりだす。

### 瞳が四角である理由

遠目からはわかりにくいですが、女面の多くは目が四角に彫られている。丸い瞳にする性格の強さが大きくなり、威嚇の様相になる。また、四角にするといわゆる瞳の面積が増し、美しさを際立たせている。

### 人の顔がはみ出す大きさ

能面は必ずあごができるくらい大きくなっており、人間が舞っていることが観客にわかるようになっている。また、全身のバランスの比率としても一番美しい、計算し尽くされたサイズになっている。

## 能面・裏側の世界

### 裏面にだけ現れる、作家の個性

現代の能面作家は、江戸時代以前に作られた「本面(ほんおもて)」を忠実に写すのが使命。オリジナリティを出すことは一切認められません。しかし、能面の裏側はというと、表のような厳格な決まりはありません。そのため、能面作家の個性が唯一発揮されるのが裏面となります。たとえば彫り方ひとつとっても、ノミの後を大きくつける、被っても面がずり落ちにくいように縞模様彫るなど様々。裏側の全面に塗ってある漆も、二色の重ね塗りをするなど作家それぞれの工夫が見てとれます。もし、手に取る機会がある時は裏側も見てください。作家の想いの片鱗が見えてくるかもしれません。



### 舞台の裏側が見えてくる、面の裏。

- 漆が塗ってあるのは、演者の汗が面にしみこまないようにするため。面は木製なので、湿気に弱い。
- 演者の汗は、面の裏側を伝いながら下あごのところに集まり、衣装の内へと流れていく。
- 演者は面の目と鼻の穴を利用して舞台を見ている。それでも見にくい。
- 口の周辺はドーム型にくり抜いてあり、演者の謡が反響しやすい構造になっている。

▲ 裏側は彫り方も自由。作家のサインを入れる事もあります。

### 由緒正しき能舞台

北海道で公開されている(期間限定)能舞台としてはただひとつと言われている小樽市公会堂能舞台。もとは荒物雑貨商として財を成した岡崎讓氏が大正15年に小樽市入船町の自宅に建てたもので、後に市に寄贈された。檜の舞台をはじめ、佐渡の神代杉や道産材が贅沢に用いられており、鏡板の老松、唐獅子、若竹は狩野派17代が描いている。格式にのっとった能舞台としては、東北以北唯一と言われる貴重な建造物。



[撮影：n-photo 原田直樹]



能面はなぜ写すことが大事？  
新作がほとんど生まれにくい能面の世界では、創作性より技術の継承に重点を置いています。メンテナンスできる後継者がいるから、600年以上も昔の芸能が現在でも観られるのです。物語を理解し、表現するには歳月が必要。「写す」ことに専念する日々です。

小樽市公会堂 能楽堂 〒047-0024 小樽市花園5丁目2番1号 TEL.0134-25-8800